

古関裕而の新民謡と地域振興

刑 部 芳 則

目次

はじめに

- 一 戦前の地域振興と新民謡ブーム
- 二 戦後復興と地域振興
- 三 戦後の第二次新民謡ブーム
- 四 高度経済成長期の新民謡
おわりに

要旨

本論では、古関が作曲した新民謡がどのようにして生まれたのかについて、戦前から戦後まで時系列に検討する。古関作品の創出過程を検討し、新民謡が生まれた背景には、戦前と戦後とで変わることなく、地域振興や観光招致という目的があったことを明らかにする。そして残り続ける作品と、消えてし

まった作品との違いについて検討する。

はじめに

令和二年（二〇二〇）にNHKの朝の連続テレビ小説「エール」が放送されたため、主役のモデルとなった作曲家古関裕而が全国的に再認知されるようになった。古関は生涯に約五〇〇〇曲を作曲しており、歌謡曲、軍歌、自治体歌、社歌、校歌、ミュージカル、映画音楽、ラジオやテレビドラマの音楽など多岐にわたる。そのなかで全国各地の新民謡も数多く作曲している。新民謡とは、明治時代に作られた「民謡ブーム」の民謡に対して、大正末期からの「新民謡運動」を受けて、昭和初期からレコード産業によって新たに作られた民謡のことをいう。

新民謡にはレコード会社が全国発売したものと、各地からの依頼に応じて特別に製造した委託盤と呼

ばれるものがある。全国発売といっても地元民にしかその存在が知られず、ほとんど売れなかったものが少なくない。さらに現在まで毎年の行事で使用されて地元民に馴染みが深いものもあれば、一方での経過とともに風化してしまい忘れ去られてしまっているものもある。

古関の生涯と代表的な作品については、拙著『古関裕而』で詳述した。しかし、新民謡については断片的な記述に留まり、巻末に掲載したレコード作品リストも一般発売されたものに限定したため、委託盤の新民謡については明記していない¹⁾。また筆者が監修・選曲・解説した『古関裕而秘曲集』新民謡・ご当地ソング編²⁾では、新民謡とご当地ソングについて解説したが、CDに収録されなかった作品については触れることができなかった。

また近年、昭和時代の新民謡の創出と展開に関する研究が登場したが、一人の作曲家の作品を通して分析したものではない。そこで本論では、古関が作曲した新民謡がどのようにして生まれたのかについて、戦前から戦後まで時系列に検討する。古関作品の創出過程を検討し、新民謡が生まれた背景には、戦前と戦後とで変わることなく、地域振興や観光招致という目的があったことを明らかにする。そして残り続ける作品と、消えてしまった作品との違いについて検討する。

一 戦前の地域振興と新民謡ブーム

詩人の北原白秋、野口雨情、西條八十などによって、大正十年（一九二一）頃から「新民謡運動」が展開された。「新民謡運動」は、卑猥な歌詞の民謡に対して健全で芸術的な新民謡を生み出すことを目的にしていた。大正十二年（一九二三）の「須坂小唄」（作詞・北原白秋、作曲・中山晋平）は、全国各地で新民謡を企画する契機をもたらした。昭和三年（一九二八）に外資系のポリドール、ビクター、コロムビアが設立されると、新民謡がレコードの一つのジャンルとなる。そのなかで昭和四年（一九二九）の「東京行進曲」（作詞・西條八十、作曲・中山晋平（歌・佐藤千夜子））は、同一三年（一九三八）二月までに二二万九二〇〇枚を売り上げる大ヒットとなった。

こうした流れを受けて古関裕而のデビュー曲は新民謡が選ばれた。昭和六年（一九三一）六月に発売された「福島行進曲」（作詞・野村俊夫、歌・天野喜久代）と「福島小夜曲」（作詞・竹久夢二、歌・阿部秀子）は、上京前に彼が作曲した作品である。新民謡は地元以外で売れる可能性が低い。昭和六年から八年まで古関は流行歌のヒット曲に恵まれなかったため、コロムビアからは新民謡の作曲を回されることが少なくなかった。

昭和七年（一九三二）八月の「八戸行進曲」（歌・

中野忠晴)は、東奥日報が「新八戸小唄」(作曲…大村能章、歌…井上ケイ子)とともに歌詞懸賞募集を行って生まれた。一等の濱まゆみの歌詞は「新八戸小唄」となり、二等の谷草二の歌詞が「八戸行進曲」として選ばれた。両者とも八戸市在住で、新民謡が地元の良さや風景を知る地元民によって作り出されていることがわかる。しかし、作曲は素人には簡単にできないため、レコード会社の職業作曲家に依頼せざるを得なかった。またオーケストラの伴奏と玄人の歌手に歌唱してもらう点でも、レコード会社に依頼するのが最適であった。

このように歌詞は地元で募集し、曲はレコード会社の作曲家に依頼するという分業制が多く見られる。古関が作曲した「八戸行進曲」は昭和七年八月二十五日に八戸市内のレコード店で発売され、二十八日の午後七時から日町錦座で発表演奏会が行われた。この曲には「新興八戸市の躍進的気分を表現する様な明るい軽いもの」が求められた。古関はそれに答えるような軽快で明るい曲調に仕上げている。

昭和八年(一九三三)六月の「山形県スキー行進曲」は、山形新聞社が「山形温泉小唄」「長井小唄」「長井音頭」とともに歌詞の懸賞募集を行って生まれた歌である。同年五月十日の締め切りまでに四曲分五八七〇編が集まった。歌詞の選定にはコロムビア文芸部も審査にあたったが、一等の当選作に該当するものはなかった。そこで山形新聞社文芸部の吉

尾薄鳥が書くこととなった。吉尾は早稲田大学に学び、同学教授西條八十が主宰する「白孔雀」に参加するなど、詩作を行っていた。吉尾は「スキー行進曲は、行進曲なるが故にテンポが早くジャズ調に作詞した」と語る一方で、「地名を一章に二三ヶ所づつ謡つたのでビジネスライタにならざるやうに努めた」という。地元の郷土色を出すには、外部の職業作詞家が書くようなものと一緒になつてはいけないという意識が読み取れる。

「山形県スキー小唄」について、『山形新聞』では「新楽団の鬼才古関裕而氏と唄に新人蒲地幸鎮氏を起用した」と紹介している。「鬼才」と「新人」という文言からは期待感の大きいことがわかる。しかし、実際には当時古関はヒット曲を生むことができず、昭和九年から契約更新はしないと宣告を受けるようになるなど苦しい立場に置かれていた。したがって、コロムビア側からすればヒットする可能性の少ない新民謡の作曲を回したと見るのが自然である。新人の蒲地もこの一曲だけで終わったことからすると、歌唱力を試す試金石であったと考えられる。

「山形県スキー行進曲」は昭和八年六月二十五日に発売され、二十六日には山形市旭座で昼夜二回の発表会が開かれた。コロムビア専属歌手の淡谷のり子、中野忠晴に、創作舞踊の南栄子、ピアノ演奏の和田肇が出演した。淡谷は赤坂小梅の「ほんとにそうなら」(作詞…久保田宵二、作曲…古賀政男)な

ども歌唱し、中野は松平晃の「サーカスの唄」(作詞…西條八十、作曲…古賀政男)とともに「山形県スキー行進曲」を歌唱している⁷⁾。集客力を考えると、新人の蒲地よりも、知名度が高く人気歌手であった中野の方がよいと判断したのだろう。実際に前売り券を買い求める市民が殺到し、高等女学校などの団体生徒は昼の部だけの入場制限を取らざるを得なくなった⁸⁾。山形市で「山形県スキー行進曲」は好評だったと見え、昭和八年十二月二十日に中野忠晴「スキー行進曲」(作詞…島田芳文)として再び発売されている。

青森県の「八戸行進曲」と、山形県の「山形県スキー行進曲」など、東北地方の新民謡が作られているのは、この時期に同地方の経済発展および地域振興を目的としていた動きのあらわれであった⁹⁾。コロムビアでは昭和九年(一九三四)一月に「広島音頭」「北海音頭」「仙台音頭」「宮城音頭」「盛岡音頭」「岩手音頭」「新秋田音頭」、三月に「横須賀音頭」を発売している。これらは昭和八年十一月の藤本二三吉「大阪音頭」(作詞…佐藤惣之助、作曲…佐々紅華)の焼き直しである。昭和九年六月の松平晃「大山行進曲」「大仙台行進曲」、八月の「大盛岡行進曲」「大青森行進曲」「大秋田行進曲」、九月の「葉隠行進曲」、同十年(一九三五)八月の「北海まつり」(歌…ミス・コロムビア、伊藤久男)も、同八年十月のミス・コロムビア「大名古屋祭」(作詞…碧海

利秋、補作…西條八十、作曲…江口夜詩)を焼き直しており、それぞれ歌詞は違うものの、旋律は同じだ。

このうち「葉隠行進曲」(作詞…原田誠吾、補作…島田芳文)は、古閑作曲の「佐賀はよいところ」(歌…藤本二三吉)とカップリングされた。佐賀県蓄音器商組合が企画し、佐賀市役所と佐賀商工会議所の後援によって作られた。佐賀県蓄音器商組合が県内から歌詞を募集し、「佐賀はよいところ」は八十四編から白山町の蒲原政次郎の作品が選ばれた¹⁰⁾。古閑は従来の行進曲とは違って、哀愁のある小唄調の新民謡に仕上げている。「佐賀はよいところ」は三〇三七枚製造されており、新民謡としては及第点の売上といえる¹¹⁾。

そのため、コロムビアでは昭和九年九月の「九州よいところ」(作詞…西岡水朗、歌…赤坂小梅)、十月の「京はよいところ」(作詞…時雨音羽、歌…松平晃)、同十年四月の「平よいところ」(作詞…岡部夜権、補作…高橋掬太郎、歌…分山田和香)と、「よいところ」シリーズを古閑に作曲させている。これらは地方の新聞社が企画したものではなく、コロムビア独自に制作したものである。ここで注目すべきは、「佐賀はよいところ」を焼き直すのではなく、それぞれ新たに作曲していることだ。古閑の場合、先述の「山形県スキー行進曲」が「スキー行進曲」になったのと、昭和十一年(一九三六)七月に宮城県の七夕祭りを

目的に発売された二葉あき子の「ミス仙台」(作詞…西條八十)が、同十二年一月の「乙女十九」(作詞…同上)になつたのを除くと、焼き直しされた楽曲はない。ここにはヒットする可能性が低い地域限定の新民謡にしても、それぞれ全力投球で作曲する古関の人情があらわれている。また現地の景色から旋律が湧いてくるという古関の作曲方法からすると、地域の異なる新民謡を焼き直すことは、許されなかったのだと考えられる。

新民謡ブームの音頭熱は昭和十年の「せんきよ音頭」(作曲…中山晋平、歌…小唄勝太郎、三島一声、藤山一郎)によって下火を迎えるが、その後も新民謡は作られた。⁽¹²⁾昭和十年代を迎えると、観光客の誘致を図るものや、産業博覧会の開催とのタイアップして作られることが多くなる。関門日日新聞社は山口県宇部市から新民謡制作の依頼を受けた。そこでコロムビアと提携し、「躍進の宇部」(作詞…古谷以和雄、作曲…古関裕而、歌…伊藤久男)が作られた。⁽¹³⁾レコードは昭和十年八月二十二日に発売された。発表会は八月二十五日夜七時から西区海岸通遊園地、二十六日夜七時から榊原公園で行われた。⁽¹⁴⁾また二十日の徳山から三十一日の山口市までサウンドトラックが県下を巡回演奏した。⁽¹⁵⁾二十二日にサウンドトラックは宇部市内の大新時計店、八木百貨店、メリー蓄音器店、明曲堂、関門日日新聞宇部支局を訪れ、「躍進の宇部」を宣伝している。⁽¹⁶⁾こうした宣

伝が功を奏し、二十六日の発表会は榊原公園に三万人が集まる大盛況となつた。⁽¹⁷⁾

三重県の「躍進四日市」は、昭和十一年三月二十五日から五月十三日まで千歳町で開催された国産振興四日市大博覧会の宣伝歌として作られた。国産振興四日市大博覧会協賛会は、日本蓄音器商会名古屋支店からの申し出を受けて、高橋掬太郎が作詞した「躍進四日市」を協賛会の制定歌とし、古関が作曲して伊藤久男に録音させることを決めた。この曲は博覧会の開催中に開場内はもとより、市中のいたるところで流された。古関の調子がよく哀愁のある「躍進四日市」は、「流暢たる旋律は人の心を浮き立たせ博覧会気分を彌が上に煽り立てた」。⁽¹⁸⁾この曲の宣伝効果もあつて、大博覧会の入場者数は目標の四十万人の三倍以上の一二四万五〇〇〇人を記録した。⁽¹⁹⁾

しかし、「躍進四日市」は博覧会が閉幕し、時間が経つにつれ地元民からも忘れられるようになる。これに対して同時期に作られて風化しなかったのが「大敦賀行進曲」である。この曲は敦賀の実業家である宇野泰三が、敦賀を全国に宣伝し、誰にでも気軽に歌えるものを求めた。⁽²⁰⁾「大敦賀行進曲」は、現在でも九月の「民謡踊りの夕べ」で、約三〇〇〇人から四〇〇〇人が踊っており、敦賀市民にとって馴染み深い曲となっている。⁽²¹⁾

長野県の「菅平シーハイル」(歌…松平晃)も、

長く地元で愛唱されている。昭和六年以降に菅平へスキーをするために訪れる客が増えたため、昭和十年には旧国鉄が群馬県渋川から長野県真田までバスを走らせた。そこで昭和十一年に上田観光協会、上小蓄音器商組合、別所温泉、菅平ホテルが、地域振興を目的として「菅平シーハイル」を制作した。上田商工会議所専務理事の岡田賢治は、作詞家高橋掬太郎を馬櫓に乗せて、菅平高原を案内した。²²古関は高橋の歌詞に軽快で明るい旋律をつけた。十一月二十日の発売は、恵比寿講に合わせたものであった。²³

古関が戦前に作曲した新民謡は、昭和十三年十月二十日に発売された「躍進大甲」(作詞・栗原白也、歌・霧島昇)で途絶える。その理由は、昭和十二年(一九三七)七月に日中戦争が始まり、それが長期化したためである。戦時中にも健全な肉体を作る目的から登山や遠足などを奨励したため、そうした名目によって観光や旅行がなくなったわけではない。²⁴しかし、国策的な建前のない戦前のような地域振興を目的とした新民謡の制作は難しくなった。

二 戦後復興と地域振興

昭和二十年(一九四五)八月にアジア・太平洋戦争が終戦を迎えると、再び新民謡が作られるようになる。戦前との共通点には地域振興および観光招致や産業博覧会の宣伝として作られ、地元の有力紙が

歌詞を募集したりしていることが挙げられる。また戦前との違いは、それらに加えて戦後復興という目的があった。戦後には一般発売とは別に、各地からの依頼に応じて「特別製造」する委託盤が増える。

古関は戦時歌謡によってヒット曲を量産し、戦後にも多くのヒット曲を生むようになる。デビューの頃とは異なり、歌謡界のヒットメーカーとなっていた。しかし、依頼があれば、古関はヒットの可能性が少くない新民謡の作曲を断ることはなかった。

古関の戦後復興の新民謡として特筆すべき曲が、広島県広島市の「歌謡ひろしま」と、長崎県長崎市の「長崎盆踊り」である。広島市は昭和二十年八月六日、長崎市は八月九日にアメリカ軍によって原爆が投下され、多くの人が亡くなった。古関は、この焦土と化した被爆地を立ち直らせるため、健筆を振るった。拙著『古関裕而』では、もともとは意図したものではなかったが、広島市の原爆で亡くなった人たちの鎮魂歌となった昭和二十三年六月の二葉あき子「フランチェスカの鐘」(作詞・菊田一夫)と、古関が長崎の原爆で犠牲となった人たち、先の戦争で亡くなられた人たちの鎮魂歌として書いた同二十四年七月の藤山一郎「長崎の鐘」(作詞・サトウハチロー)を紹介した。

本論ではそれらよりも先に古関が広島と長崎のために書いた秘曲について述べる。広島県の中国新聞社では、広島市の復興を願う歌の制作を企画した。被

爆から満一年が経った昭和二十二年八月九日に歌詞と楽譜が発表された。五〇〇〇を越える作品のなかから、中国新聞社に勤める山本康夫が妻紀子の名義で応募したものが選ばれた。作曲家として古関が指名された理由ははっきりしない。古関は「歌謡ひろしま」の作曲について、「何処でも誰にでもうたへるやうにしたつもりで、これがやがて広島全市民の口になめらかに浮かんで来る日を待ってゐる。その日こそ広島(25)の平和復興の日であらう」と述べている。当時はレコード化されなかった。楽譜を見ると、市民歌のように格調がありながら、童謡のようなテンポで歌い易い。

これが誕生した当時は発表会も開かれたが、時間の経過とともに歌われなくなり、知る人の数も減っていった。令和二年（二〇二〇年）一月に中国新聞で取り上げられたのがきっかけとなり、NHK広島で放送されたりして、再び広島市民の知るところとなった。(26)そして、日本コロムビアからCD化された。

もう一曲全国的には知られていない長崎の鎮魂歌が、昭和二十二年に作られた「長崎盆踊り」（作詞・小川流太郎、歌・霧島昇、音丸）である。ニューギニア戦線から帰還した本多正邦という青年は、実家はもとより肉親の姿もない、焦土と化した長崎の風景を目の当たりにした。本多は長崎市民を勇気づけ、被爆犠牲者を供養するための盆踊り大会を企画

する。青年団の活動を通して歌詞を公募し、レコード化の資金を集めた。

その結果、朝日新聞長崎支局記者の小川流太郎の作品が選ばれた。本多の親類の代議士を通して映画監督中田耕二や島耕二を紹介され、そこからコロムビアレコード化の話が持ち込まれた。そして古関が作曲することとなった。「長崎盆踊り」は、昭和二十二年八月九日に開催された「平和盆踊り大会」で発表された。(27)

島根県松江市では、昭和二十三年（一九四八）九月十五日から十月十八日まで、松江市と松江商工会議所の共催による「貿易と観光大博覧会」が開かれた。入場者は約三〇万人を記録した。(28)「貿易と観光は日本再建の両翼」とみなし、優良輸出品を中心とした国内製品を陳列し、「観光日本」と「文化日本」を紹介することが開催の趣旨であった。(29)この会場で流されたのが、西條八十作詞で古関が作曲した「松江夜曲」である。県下各地を回る博覧会宣伝のバスでも流され、行く先々で「松江夜曲」の舞踊も披露された。(30)

西條が松江の名所古跡を盛り込んだ「松江夜曲」に、古関はエキゾチックな哀感のある小唄調のメロディーをつけた。とくに「まつまつ松江は 君を待つ」というサビの部分が耳に残る。「松江夜曲」のレコードは、昭和二十三年七月八日に音丸が録音しているが、一般発売されなかった委託盤である。昭

和五十七年（一九八二）に松江市をメイン会場とした第三十七回国民体育大会「くにびき国体」の開催に向けて、前年九月に「松江夜曲」（歌・わかばちどり）³¹はリバイバルされた。このリバイバル盤は全国発売している。

「松江夜曲」は現在でも地元の舞踊会によって継承されているが、これは国体を盛り上げるためにリバイバル盤が作られたことが大きかったと考えられる。それは古閑が作曲した島根県民の歌によくあらわれている。島根県民の歌は、昭和二十六年（一九五一）にサンフランシスコ講和条約の締結による日本の独立を記念して制作された。歌詞の募集は、島根新聞とNHKのラジオを通して行われた。NHK松江放送局長、島根新聞社主筆および編集局長などが審査委員となり、「薄紫の山脈」と「青い空なら」が選ばれた。³²両曲とも古閑が作曲し、昭和二十七年五月十三日に藤山一郎が「薄紫の山脈」、十四日に岡本敦郎と安西愛子が「青い空なら」を録音した。このレコードは、委託盤として制作され、昭和二十七年に松江市公会堂で発表会が開かれた。

島根県民の歌も、くにびき国体の開催に際して「県民意識の高揚を図る」目的で、昭和五十六年（一九八一）にビクターでレコード三〇〇〇枚、カセットテープ五〇〇本が制作された。平成九年（一九九七）と十一年（一九九九）に昭和五十六年のレコードをCD化している。³³リバイバルされたレコードの

表面は「薄紫の山脈」のステレオ盤で、裏面は古閑が新たにアレンジした「薄紫の山脈」の行進曲であり、「青い空なら」は含まれていない。これにより県民から「青い空なら」の記憶は消えていき、島根県民の歌は「薄紫の山脈」だけになってしまった。「松江夜曲」もリバイバルされなければ、忘れられたかもしれない。

実際にリバイバルされず、「松江夜曲」とは対象的に忘れられたのが「高松夜曲」である。香川県高松市は、「新生日本の生きる道は、国内産業の振興による海外貿易と世界の観光地として立ちあがる事」という趣旨で、昭和二十四年（一九四九）三月二十日から五月二十日まで「高松大博覧会」の開催を企画した。³⁴この記念歌として「高松夜曲」（歌・藤山一郎、奈良光枝）と「高松ぞめき」（歌・赤坂小梅）が作られた。レコードの制作を任されたコロムビアは、作詞は両曲とも野村俊夫、タンゴ調の「高松夜曲」は古閑、小唄調の「高松ぞめき」は大村能章に作曲を指名した。委託盤のレコードは三〇〇枚製造され、二〇枚は宣伝用に使用し、残りは一枚四五〇円で発売された。当時の記録によれば「市内で大流行で、劇場、ダンスパーティ、喫茶店で相当に受けたが、宣伝用として遊覧船内や宣伝自動車、声の新聞にも折込んで利用され、ことに高松放送局によるコンサートは全国的に郷土自慢として紹介された」という。³⁵しかし、昭和三十年（一九五五）頃ま

で観光案内に「高松夜曲」の歌詞は載っていたが、博覧会の記憶が薄れるとともに忘れられていった。

静岡県の静岡鉄道では、昭和二十四年の秋から従業員の慰安会を毎年開催するようになる。最初の「家族慰安会」には藤山一郎の幹旋で、作詞家藤浦洸と古閑が出席した。静岡鉄道の社長川井健太郎と藤山は、太平洋戦争中にジャワ島スラバヤで知り合い、終戦後も交流があった。「家族慰安会」では会場から題名を募集し、即興で歌を作るという企画が行われた。会場から「静岡ファンタジー」と題名が出され、約三〇分間で藤浦と古閑が作詞作曲し、藤山が歌唱した。⁽³⁶⁾藤山がレコード化を持ちかけたように、昭和二十四年三月二日に録音された。だが、委託盤であったため、次第に従業員の間でも知る者が少なくなった。平成元年（一九八九）十二月には「静岡ファンタジーは静岡の人に知ってもらいたい歌」と明記されており、無名な歌になってしまっている。⁽³⁷⁾

愛知県蒲郡でも、戦後復興のなかで観光宣伝の歌が作られた。昭和二十五年（一九五〇）六月に蒲郡町観光課は中部日本新聞社と共催し、中央放送局、名古屋鉄道局、名鉄電車の後援を得て、「観光蒲郡の歌」の歌詞を募集した。⁽³⁸⁾六月二十八日の締め切りまでに約四〇〇編の応募があり、そのなかには後述する「夢の豊橋」の作詞者である河西新太郎も応募していた。⁽³⁹⁾結果は蒲郡市在住の勝浦仙太郎の作品が

選ばれ、選者のサトウハチローが補作した。⁽⁴⁰⁾七月十六日の『西宝民報』に古閑の作曲とレコード化が決定されたとあるから、作曲者はコロムビアが選定したと考えられる。

古閑が作曲した譜面は、八月三日に蒲郡町観光課に届けられた。⁽⁴¹⁾九月七日には国民病院三階ホールで「観光蒲郡の歌の授賞式」が開かれ、勝浦をはじめ入賞者が出席した。⁽⁴²⁾「観光蒲郡の歌」の発表会は、十月一日に中央公民館の上棟式記念行事として行われた。コロムビアの専属バンドの演奏で、新人歌手奥村義金と鈴木幸子で披露された。⁽⁴³⁾レコードは委託盤で五〇〇枚製造され、蒲郡町役場観光課および町観光協会を窓口として、一枚三〇〇円で買うことができた。『西宝民報』では「歌そのものはいいし、作曲者も一流の古閑裕而氏だから評判そのものは決して悪くないと思う」と評価している。⁽⁴⁴⁾タンゴ調の「観光蒲郡の歌」（歌・伊藤久男、奈良光枝）は蒲郡駅で流されていたが、昭和四十九年（一九七四）に三波春夫の「蒲郡ふるさと音頭」（作詞・北村桃児、作曲・遠藤実）が作られると、「観光蒲郡の歌」の使命は終わったようである。

蒲郡とほぼ同時に観光招致のため、産業や文化の宣伝歌を求めたのが、岐阜県古川町（現・飛騨市）である。昭和二十五年に飛騨市では古川町俚謡制定委員会が設置され、「俚謡を通じ古川町の観光及び産業・文化の宣伝をはかる」という目的から、「飛

驛古川小唄」を作ることとなった⁽⁴⁵⁾。新聞で歌詞を募集し、二六七編のなかから岐阜市在住の峰陽之介の作品が選ばれた。飛驒市は古賀政男に作曲を希望したが、それは実現せず代わって古閑が作曲することとなった。五月一日に飛驒市の高山会館、二日に古川劇場で発表会が開催された。レコードは委託盤で二〇〇枚しか製造されなかった。⁽⁴⁶⁾昭和五十年頃まで観光誘致の宣伝歌として使われていたが、その後次第に忘れられていった。

これまでの楽曲ではリバイバルされた「松江夜曲」を除くと、時間の経過とともに消えてしまっていることがわかる。そのなかで昭和二十五年に愛知県刈谷市で作られた「刈谷音頭」(作詞・藤浦洸、歌・二葉あき子、岡本敦郎)と「刈谷小唄」(作詞・サトウハチロー、歌・赤坂小梅、鶴田六郎)は、現在でも盆踊りの定番曲となっている。両曲は刈谷市制一周年を記念して作られた。名古屋の放送局を介して作曲を古閑に依頼した。委託盤だが、市内の楽器店や市役所では一枚二七〇円で販売された。その後SP盤の時代が終わるとEP盤で復刻プレスされた。現在でも「刈谷市民踊愛好会」が継承に努めており、毎年夏の盆踊りでは定番曲となっている。⁽⁴⁷⁾新民謡が生き残る鍵は、地元の舞踊集団の活動の有無といっても過言ではない。

岡山県倉敷市では、昭和二十六年九月に倉敷市役所商工衛生部と商工課が「倉敷小唄」の歌詞を募集

した。公募の条件は「産業及び観光文化都市として躍進する大倉敷市にふさわしく明朗なもので広く愛唱され、倉敷の内容と要素をもった作品であること」、「調子は随意で、歌詞はなるべく四章程度のもの」であった。⁽⁴⁸⁾「産業及び観光文化都市として躍進する大倉敷市」という文言からは、戦前の「躍進四日市」や「大敦賀行進曲」などとの連続性を感じる。

九月二十日の締め切りまでに二二九作品が集まり、西條八十の審査を経て十月二十四日の審査委員会で後月郡井原町上町在住の塚本昭弘の歌詞が選ばれた。コロムビアレコードで、「倉敷小唄」の作曲を古閑、「倉敷音頭」(歌・久保幸江、加藤雅夫)の作曲を大村能章と決めた。「倉敷小唄」は当初は霧島昇と奈良光枝が歌うを予定であったが、実際には岡本敦郎と奈良光枝となった。⁽⁴⁹⁾委託盤のレコードは、倉敷市商工課で購入することができた。⁽⁵⁰⁾

「高松夜曲」のように博覧会の記憶の風化と、「観光蒲郡の歌」のように音頭に代わってタンゴ調の曲が消えるというのは、愛知県豊橋市の「夢の豊橋」と「豊橋観光音頭」でも確認できる。古閑が「夢の豊橋」を作曲した理由ははっきりしないが、昭和二十五年発行の『夢乃豊橋』に「作詞河西新太郎、作曲古閑裕而」と明記されている。「夢の豊橋」は「観光蒲郡の歌」によく似たタンゴ調である。一方の「豊橋観光音頭」は豊橋観光協会選と書かれているものの、作詞者と作曲者名は記されていない。この

ことから「豊橋観光音頭」は、昭和二十七年（一九五二）七月十五日から十七日の「豊橋まつり」に合わせてレコード化される際に、古閑が作曲したと考えられる⁽⁵¹⁾。

「豊橋観光音頭」（作詞・中林とみを、歌・鶴田六郎、久保幸江）は昭和二十七年六月七日、「夢の豊橋」（歌・岡本敦郎、奈良光枝）は六月九日にレコード録音された。レコードは委託盤だが、七月七日から市内楽器店や商工会議所で一枚二五〇円で購入することができた⁽⁵²⁾。七月八日に中央公民館で「豊橋まつり前夜祭」が開催され、ここでは両曲の発表会も行われた。病気のため久保幸江は欠席したが、鶴田六郎は歌唱している。会場には二五〇〇人が集まった⁽⁵³⁾。

「夢の豊橋」はタンゴ調で作曲されたが、その寿命は短かった。昭和二十九年（一九五四）三月二十日から五月十日まで復興と進展をテーマとした「豊橋産業文化大博覧会」が開催されると、「豊橋博音頭」（作詞・五条朝臣、補作・野村俊夫、作曲・大村能章、歌・伊藤久男、神楽坂はん子）とのカップリングで再び「豊橋観光音頭」がレコード化された。これも特販で戦前のように全国発売はされなかった。このときに音頭だけが残されて、「夢の豊橋」は観光宣伝歌としての役割を終えたのである。そして「豊橋観光音頭」も「豊橋博音頭」とともに、博覧会が終了して、その記憶が薄れるにつれて市民か

ら忘れられた。

三 戦後の第二次新民謡ブーム

戦争によって途絶えた地域振興の博覧会の開催や新民謡の制作が、終戦後に再び創出したことは前章で確認した。地域振興の手段として新民謡が注目された背景には、戦前に新民謡ブームが起きたように、戦後に第二次新民謡ブームがあったことが大きい。この第二次新民謡ブームは、昭和二十六年に日本がサンフランシスコ講和条約の締結により、連合国軍の統治支配下から独立することが決まった頃から加熱した。

そのことがよく現れているのが、昭和二十六年にヒットした「トンコ節」（作詞・西條八十、作曲・古賀政男）である。古賀は、この歌の創作について「終戦後、炭坑節というのが流行った」、「それで炭坑節というものがあるから、トンコ節としたらどうか」と思って、「トンコトンコ」という「トンコ節」を作ったと語っている⁽⁵⁴⁾。しかし、この曲は昭和二十四年一月に楠木繁夫と久保幸江のデュエットで発売したときには売れなかった。そこで昭和二十六年四月に歌詞を変更して加藤雅夫と久保のデュエットで再発売したところヒットした。

この流行背景について音楽評論家吉光明は、「去年（筆者註・昭和二十五年）の秋、文部大臣が

「旗日には国旗を出して、それから『君が代』を歌って……」と言った。ぼくはその影響だと思うのだが、去年の十一月あたりから非常に戦前のような観方が出てきたようで」と発言している。この意見に古関が「トンコ節があたったというのはそういうところにあるのではないですか」というと、作曲家服部良一が「日本的なものが出たのは、バタ臭いものに反発して出てきたと思う」、「それがほんとに日本の民謡の姿で、それにうまくあえば必ずヒットする」と続けて述べている。⁵⁵

占領下の日本ではアメリカのジャズやブルースなど外国曲調の歌謡曲が流行した。しかし、統治支配を快く思う国民はいるわけがない。昭和二十六年頃から新民謡やお座敷ソングなど日本調が続出するのには、統治下の欧米音楽に対する反動があったと考えられる。さらに日本の独立が決まった解放感も影響している。また昭和二十五年六月から二十八年三月まで朝鮮戦争が起きたことにより、国内で特需景気と呼ばれる経済の活性化も大きかった。昭和二十六年一月三日放送の「第一回NHK紅白歌合戦」では、赤坂小梅「三池炭坑節」と鈴木正夫「常磐炭坑節」の民謡対決が行われている。⁵⁶日本での外国調に對して日本調が流行したのは、昭和二十七年一月に江利チエミの「テネシー・ワルツ」がヒットしたのを受けて、神楽坂はん子の「ゲイシャ・ワルツ」(作詞・西條八十、作曲・古賀政男)が作られて同じよ

うにヒットしたことにもあらわれている。

こうした社会背景のなかで東京都葛飾区は「葛飾音頭」の制作を企画した。昭和二十六年二月に葛飾区は「文化的意識と健全な区民精神の昂揚を計る」という目的で「葛飾音頭」の歌詞を募集した。歌詞には「葛飾区の伝統産業文化の発展を取入れたもので振付をし老若男女の健全娯楽として一般区民の利用出来るもの(四節程度)」が求められた。⁵⁷二月二十八日の締め切りまでに九八編が集まり、区長、区議会議長、教育委員長、NHK文芸部長、東京藝術大学教授平井保喜、キングレコードの小沢直与志など十一人の審査員の審査を経て、葛飾区在住の鈴木芳一⁵⁸の作品が一等に選ばれた。

同時に募集された「葛飾区歌」の作曲が審査員の平井に依頼されているのはわかるが、「葛飾音頭」がキングレコードの専属作曲家ではなく、古関に依頼されたのは不思議である。六月十五日の広報では「葛飾音頭はコロムビア専属の古関裕而氏の作曲と児童舞踊向の振付を行つて何れもレコードに吹込み区行事や一般区民の情操教育のために普及活動を行うこととなり準備を進めている」という。⁵⁹委託盤のレコードは五月二十五日に岡本敦郎と久保幸江が録音した。「葛飾音頭」は現在でも葛飾区内の盆踊りなどで使われている。

昭和二十八年(一九五三)一月に徳島県池田町議会の産業経済委員会では、「観光池田」を広く宣伝

するため、「阿波池田小唄」を制作することを決めた。同年十月の「第八回国民体育大会」では池田がレスリング競技の会場となっている。これも地域振興の機会となった。同年四月に「阿波池田小唄」の歌詞は、応募作品一三五編のなかから、広島県豊田郡豊田村在住の木下潤のものが選ばれた。⁽⁶⁰⁾この段階で作曲者は決まっていなかったため、池田町役場助役内田太郎は、レコードや楽器を取り扱っていた藤野時計店の店主藤野一治に相談している。藤野は取引先のコロムビア営業社員に作曲者を一任し、歌手には「ゲイシャ・ワルツ」の神楽坂はん子を希望した。⁽⁶¹⁾

ここから古関の作曲を指名したのはコロムビアであることがわかる。六月末までに作曲は完成し、その楽譜が池田市に届けられた。池中講堂ではその楽譜を使って演奏し、テープレコーダーに録音している。⁽⁶²⁾この音源で池田市公民館で八月十六日から十八日まで練習会が行われ、十九日の夜に発表会が開催された。委託盤のレコードは、八月十九日に久保幸江と鶴田六郎が録音し、三〇〇枚が製造された。仕事の都合が合わなかったのか、神楽坂の録音は実現しなかった。レコード制作には二〇万円（作曲料四万円、レコード吹込料一三万四〇〇〇円、レコード三〇〇枚の製造費六万円）かかっている。これについては「こんなにしてまで観光池田を宣伝しても、受入体勢が充分でなければ、どうかと思う」と批判

の声も出た。しかし、池田市としては「必死の観光政策」であった。⁽⁶³⁾

岡山県井原市では昭和二十九年に「井原音頭」（補作・藤浦洸、作曲・米山正夫、歌・神楽坂はん子、村岡十九夫）と「井原小唄」（歌・永田とよこ）が制作された。井原市商工会議所が市制施行一周年記念祝賀行事として企画したものである。歌詞は一般募集し、作詞家藤浦洸が選者となった。同年三月に「井原小唄」の歌詞は、倉敷市平和町在住の片山八郎の作品が選ばれ、藤浦が補作した。⁽⁶⁴⁾古関が「井原小唄」を作曲したのは、レコード化に際してコロムビアが指名したものと考えられる。藤浦が古関を紹介したとすれば、「井原音頭」を米山が作曲するとはなかったに違いない。

こうした全国各地から新民謡の依頼を受けたコロムビアは、新民謡ブームの再来を感じた。昭和二十九年五月から九月にかけて北海道から沖縄県まで全四七都道府県の新民謡を発売している。このうち古関作品は「福島音頭」と「東山甚句」、「百万石音頭」と「金沢小唄」、「長崎音頭」と「長崎小唄」のレコード三枚六曲である。この三枚は地元の放送局と新聞社が選定し、観光協会および連盟から推薦を受けるという形で制作されている。

昭和二十九年六月の「福島音頭」（作詞・野村俊夫、歌・伊藤久男、神楽坂はん子）は福島民報社、ラジオ福島の選定、福島県観光連盟、福島県教育委

員会の推薦、福島蓄音器組合の協賛、「東山甚句」

(作詞：同上、歌：霧島昇、久保幸江)は福島民報社、ラジオ福島の選定、福島県観光連盟、会津東山観光協会、会津観光商会の推薦、福島蓄音器組合の協賛であった。同年八月の「百万石音頭」(作詞：丘十四夫、歌：伊藤久男、永田とよ子)と「金沢小唄」(作詞：同上、歌：久保幸江)は、石川県教育委員会、石川県観光連盟、北国新聞社、金沢放送局、北陸放送局、石川県婦人団体連絡協議会協賛によって作られた。同年九月の「長崎音頭」(作詞：藤浦洸、歌：藤山一郎、奈良光枝)と「長崎小唄」(作詞：同上、歌：久保幸江)は、ラジオ長崎と長崎新聞社が選定し、長崎県観光連盟から推薦を受けた。

全国各地で地域振興につながる観光宣伝歌として期待されたことがうかがえる。「福島音頭」と「東山甚句」については、管見の限り『福島民報』の広告記事以外で確認することができない。その点は「百万石音頭」と「金沢小唄」でも一緒である。『北国新聞』には、両曲について「コロムビアが勝手に作った「小唄」であり「音頭」であるから、なんでもいいじゃないかということになるかもしれないが、いやしくも郷土にあつて郷土を愛するものにとつては、どうにもガマンのできぬしるものである」と、投書を寄せる県民もいた。⁽⁶⁵⁾

この人物の不满は、丘灯至夫が書いた「お城とろうか百万石の男度胸のエー鏡山」にはじまる「百万

石音頭」と、「箴(オサ)の苗から朝陽がのぼる」

にはじまる「金沢小唄」の歌詞の内容であった。「歌詞の低調なることまことにお恥ずかしいかぎりのものだといくらか歌や詩に心のあるものはみんないつている」と酷評する。しかし、古関の作曲については「聞くところによると作曲は非常によいという。作詞がまずいうえに曲までつまらぬとあつてはやりきれまい」と、対照的な評価をしている。⁽⁶⁶⁾

こうした批判はあるものの、石川県内の大手組織の協賛によって作られ、普及に努めたため、昭和二十九年七月から八月の盆踊りで踊られている。その象徴的なのが、八月五日の夜七時から兼六園広場で行われた「北国納涼盆おどり大会」である。石川県社会保険協会、北陸放送、北国新聞社の主催で開かれ、八月一日の『北国新聞』では「金沢小唄」の振り付けが紹介されている。⁽⁶⁷⁾「百万石音頭」は、昭和四十年代にEP盤で復刻され、金沢蓄音器館ではCDが販売されており、現在でも「金沢百万石まつり」の定番曲である。⁽⁶⁸⁾一方、SP盤だけでその後復刻されなかった「金沢小唄」の存在は忘れられていった。

「長崎音頭」と「長崎小唄」は、昭和二十九年八月二十四日に長崎松竹国際で「コロムビア歌謡祭」が開かれ、コロムビア・ローズと鳴海日出夫が出演して発表された。⁽⁶⁹⁾実際のレコードは、昭和二十四年にヒットした「青い山脈」(作詞：西條八十、作曲：服部良一)のコンビである藤山一郎と奈良光枝が録

音した。発売当時の『長崎新聞』では「歌詞は長崎県出身の藤浦洸氏が作つたものだけに郷土的情感にあふれたもので早くも流行のきざしを見せている」と紹介している。⁽⁷⁰⁾コロムビアは藤浦が長崎県出身のため作詞を指名したと考えられる。藤山は古関作曲の「長崎の鐘」「長崎の雨」「長崎の花」を歌っていた。「長崎の鐘」と「長崎の雨」がヒットしたため、古関と藤山のコンビにさせたのだろう。

昭和二十九年八月二十二日から二十六日まで札幌市で第九回国民体育大会が開かれた。大会には昭和天皇と香淳皇后の臨席が予定された。狸小路商店街では、この機会に「第一回狸祭り」を開催し、全国に商店街を宣伝しようとした。⁽⁷¹⁾そこで企画された宣伝歌が「狸小路ばやし」(作詞：ほしやま・さくら、補作：丘十四夫、歌：永田とよこ、山中ひろし)と「狸小路の歌」(作詞：濱真弓、補作：丘十四夫、歌：山路えり子)である。

昭和三十六年(一九六一)九月発行の『さつぽろ狸小路』では、「毎日お昼近くになると、HBCのラジオ放送で「ハァー わたしや さつぽろネ 狸小路の…」と軽やかなメロデーが流れ出して、道民には馴染深いものになっているのが「狸小路はやし」なのである。これは昭和二十九年夏に開かれた第一回の「狸まつり」に際し作られたもので、今では幼ない子供でも口になっている」という。⁽⁷²⁾

ところが、翌三十七年(一九六二)八月に「狸小

路の唄」(作詞：野坂昭如、作曲：いずみたく、歌：朝丘雪路、ボニー・ジャックス)ができると、これがHBC放送の昼の放送で流れるようになる。⁽⁷³⁾この新しい歌により、古関の「狸小路ばやし」と「狸小路の歌」はあまり使われなくなっていた。次第に札幌市民の記憶からも遠ざかってしまった。次章で述べるように、高度経済成長期には、戦前から新民謡を作ってきた古関から、当時頭角をあらわしてきた次世代の作曲家の作品に移行していった。

四 高度経済成長期の新民謡

朝鮮戦争による特需景気を経て、昭和二十九年十一月から神武景気が始まった。昭和三十一年(一九五六)の『経済白書』には「もはや戦後ではない」と書かれ、日本は高度経済成長を迎えることとなる。この時期は古関にとって歌謡曲から舞台音楽へと作曲の転換期であった。そのきっかけは東宝の重役に迎えられた盟友の脚本家菊田一夫が古関に舞台劇の音楽担当を依頼したことによる。古関によれば、軽井沢を訪れていたとき、菊田から依頼されたという。⁽⁷⁴⁾軽井沢には西條八十の別荘があり、そこに古関は家族を連れて遊びに行ったこともある。⁽⁷⁵⁾古関は軽井沢に別荘は持たず、多くの文豪など文化人が宿泊したことで有名な「つるや旅館」を定宿にしていた。「つるや旅館」の裏には、菊田の別荘があつ

た。

古関と菊田にとって軽井沢は思い出の深い場所であつたが、その新民謡を作ることとなつた。「新軽井沢音頭」は、昭和三十一年六月の定例町会で、軽井沢開発七〇周年記念事業として制作が企画された。軽井沢町長佐藤不二男は、面識のある菊田に作詞を依頼した。古関の作曲は、菊田を通して依頼されたと考えられる。菊田との仲介者が町長に宛てた手紙では、「菊田には七月一〇日〆切とお願いしてあつたが一五日までできていないが一両日中にはなるとかなりそうだ。古関先生は原稿が入手すれば直ちに作曲すべく用意しているとの返事をもらつてゐる」とある⁽⁷⁶⁾。

その後、七月十九日に歌詞が仕上がり、それから古関が作曲に取りかつた。七月二十五日に永田とよこと山中ひろしが録音している。「新軽井沢音頭」は、昭和三十一年八月二十日の軽井沢開発七〇周年記念式典で発表された⁽⁷⁷⁾。八月の記念式典での発表に合わせるため、タイトなスケジュールで行われていたことがわかる。

この翌年の昭和三十三年（一九五七）に古関は島根県大田市の「大田小唄」を作曲している。同市は昭和二十九年に安濃郡大田町など複数の郡町村が合併されて誕生した。これを機に「大田小唄」の歌詞と作曲の募集が行われた。歌詞は五一編の作品から安部美枝子、作曲は七編の作品から畑中忠雄のもの

が選ばれた⁽⁷⁸⁾。しかし、昭和三十三年のレコード化では使われず、新たに古関が作曲することとなつた。当時の大田市長は「少し歌にくい点があるのでこれを添削」と述べているため⁽⁷⁹⁾、歌い易いものへ作り替えたと考えられる。観光協会では島倉千代子の歌唱を希望したが、実際には岡本敦郎と奈良光枝が録音している。

歌謡界の流れは早く、昭和二十年代の岡本や奈良よりも、同三十年代にヒット曲を飛ばしていた島倉やコロムビア・ローズの方が人気を得るようになって。各地の新民謡の依頼主たちは、前者二名よりも後者二名を望む。そのことは群馬県沼田市ではつきりする。群馬県沼田では「皆に親しまれるふるさとの民謡的な歌も踊りも無かつた」、「皆がよれば丸沼音頭や水上小唄だの、よその歌なり踊りをするしかなかった」という状況であつた。商工婦人部は「是非何かふるさとの歌が欲しい」と、沼田市役所に陳情した⁽⁸⁰⁾。この陳情を受けて、有名な作詞家と作曲家に依頼して沼田の新民謡を作ることが決まつた。昭和三十三年（一九五八）十月には「誰にも唄える沼田の歌をつくる委員会」が発足し、二六人の委員が委嘱され、会長には沼田市長高橋幸雄が就任した⁽⁸¹⁾。委員会では「沼田の歌」の作詞を西條八十、作曲を上原げんと、「沼田音頭」の作詞を西沢爽、作曲を米山正夫に依頼することとした。「小唄調」の「沼田音頭」とカップリングされる「沼田の歌」は、「今

年の産業祭から呼び物にしようという天狗パレードを主題とした音頭調⁽⁸³⁾が企画された。昭和三十四年（一九五九）八月十三日に西條は沼田市を見物し、十四日には委員会にも出席している。この席で西條は「歌をつくることは、土地を宣伝することばかりでなくその時代の文化財を残すことでもある。その土地を宣伝するために固有名詞をたくさん入れた歌は流行しないし、またいい歌が出来ない。したがって土地の名称を半分、人情を半分盛り込んだ、色気のある歌は、いつまでも人々に愛誦されている。芽生えた歌は大切に育てるといふ気持ちが欲しい」と述べている⁽⁸⁴⁾。

西條は沼田見物で「天狗まつり」に興味を持ち、九月に「沼田天狗おどり」と題する「沼田の歌」を作詞した。委員会では作曲を上原げんとを希望していたが、西條の意向で古閑に依頼することとなった⁽⁸⁴⁾。西條は上原と歌謡曲のヒット曲を出していたが、「沼田天狗おどり」には古閑がふさわしいと直感したのだろう。昭和三十年代に西條と古閑は、校歌や社歌を数多く作っていた。一般発売の歌謡曲とは違って、学校や会社など依頼主のいる委託盤は古閑と組むとよいものができると感じていたのかもしれない。「沼田天狗おどり」は村田英雄とコロムビア・ローズ、「沼田音頭」は島倉千代子がレコードに録音した。昭和三十四年十一月二十五日に沼田中学校体育館で発表会が開かれ、レコードは市商工課

で一枚三〇〇円で購入することができた⁽⁸⁵⁾。

高度経済成長期には会社が急成長し、団体旅行を実施する企業も少なくなかった。温泉旅館やホテルは、そうした対象となった。温泉は観光誘致の目玉であり、それにレジャー施設を複合させたヘルスセンターが登場した。その一つが昭和三十三年十月一日に宇都宮市大谷の観光施設として開館した宇都宮ヘルスセンターである。「宇都宮ヘルスセンター音頭」（歌：五月みどり、加藤雅夫）は、この開館一周年の記念事業として作られた。昭和三十四年七月に歌詞を募集し、作詞家田沢武男のものが選ばれた。十月七日表彰および発表会が行われ、発表会では飯塚楽団の演奏でビクターの森田茂子が歌唱している⁽⁸⁶⁾。

この音頭とカップリングになったのが、島倉千代子が録音した「大谷小唄」である。歌詞は募集作品の中から堀江紅村のものが選ばれた。宇都宮ヘルスセンターの近くにある平和観音像は、アジア・太平洋戦争の戦没者の霊を弔い、世界平和を祈念し、高さ八丈八尺八寸（約二七m）の大谷石を彫刻したものである。「大谷小唄」は、これら観光と名産を歌っている⁽⁸⁷⁾。昭和時代に人気であった温泉施設も、平成時代にバブル経済が終わる頃から衰退していった。宇都宮ヘルスセンターも集客できなくなり閉館に追い込まれた。「宇都宮ヘルスセンター音頭」と「大谷小唄」は、同施設の衰弱とともに消えていった。

新潟県の越路町では、昭和三十五年に町が誕生してから五周年記念として、町民が一つになって歌って踊れる歌を作ることとなった。このとき朝日酒造社長の平沢達夫は、戦争中に知り合った古関に作曲を依頼した。⁸⁸そして生まれたのが青木光一と島倉千代子「越路小唄」(作詞・片桐顕智)である。同時にティチクレコードで作られた「越路盆唄」(作詞・藤田まさと、作曲・春川一夫)は、地元出身でのちに名譽町民となった三波春夫が歌っている。そのため「越路盆唄」の方が支持され、「越後小唄」は忘れられていった。

この翌年に古関が作曲した愛媛県新居浜市の「新居浜音頭」(作詞・黒光千恵子、歌・コロムビア・ローズ)も人々の記憶から遠ざかった音頭である。そもそも新居浜市は昭和二十二年に市制一〇周年記念として「新居浜音頭」、同三十二年に同二〇周年記念として「新新居浜音頭」を作っていた。この「新居浜音頭」の歌詞に新たな曲をつけたのが古関の「新居浜音頭」である。厳密に言えば、「新新居浜音頭」にあたる。新居浜市、新居浜商工会議所、新居浜観光協会が企画し、昭和三十六年四月九日の「滝の宮公園まつり」で発表された。⁸⁹

宇都宮ヘルスセンターが光輝いていた頃、消えていった行政区画があった。昭和三十六年六月に清水市に編入された静岡県興津町である。同年に作られた「興津の四季」の作詞者松永香苗は、行政区画と

して消えてしまう郷土を歌にして残そうと考えた。自主制作の委託盤で、当時人気の島倉千代子を起用し、古関に作曲を依頼した。地域住民に配布されたと思われるが、行政区画が消滅してしまうと使われる可能性は低い。平成十三年(二〇〇一)には清水市も静岡市に合併されている。現在では地域住民でも知る人ぞ知る幻の新民謡になってしまった。

「宇都宮ヘルスセンター音頭」は戦前からの一分間に七八回転のSP盤で制作されたが、「興津の四季」は一分間に四五回転のEP盤で制作されている。昭和三十六年にシュラックを原料とするSP盤の製造は終了し、塩化ビニール製のEP盤へと引き継がれた。さらに安価で製造できる薄手のシート盤も登場した。家電の三種の神器も神武景気の白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫から、いざなぎ景気による新・三種の神器のカラーテレビ、クーラー、自動車へと移行する時期を迎えていた。全国的な好景気と従来よりも安価にレコード化できるようになったことが重なり、この時期以降に全国各地の新民謡は急増していく。

しかし、その動きと反比例するように古関の新民謡数は激減する。そのなかで特筆すべき二つの音頭を作っている。昭和四十四年(一九六九)の「池上音頭」と、同四十五年(一九七〇)の「音更音頭」である。「池上音頭」は古関と池上本門寺との意外なつながりから生まれた。古関は昭和四十三年(一

九六八）に池上本門寺朗子少年少女合唱団の結成にあたり、その指導者として顧問を務めた。古閑は「野村俊夫君（作詞家）が本門寺さんの近くに住んでいましたね。昭和二十五年頃よく一緒に仕事をやったものでした。その頃お会式の準備にぶつかり、ぜひ万燈（まんどう）で賑やかな時にお詣りしたいものと思っていましたが、仕事の都合でどうしてもぬけられず、いまもって機会があつたら……と思いつづけているのです」と語っている⁹⁰。

池上本門寺から顧問を依頼された古閑は「讃仏歌」を作ること望んだ。その想いを「仏教と少年合唱団は、ピッタリしないと思われるかも知れませんが、精神面を向上させたり道徳心を涵養するため効果のあることだと思うんですよ。といっても古い形や、固いものを歌わせるのではなく、新しい形の讃仏歌、現代の少年や少女が喜んで歌ってくれるものをつくりたいですね」、「とくに声明（しょうみょう）には、ローマ旧教のグレゴリー歌と同じ要素が生きてますね。インドに発生した古代音楽が、東と西に別れてこのような形になったのではないでしょう。か。こうした旋律は大事にしたいと思いません」と述べている⁹¹。

この翌年には池上本門寺の盆踊りを盛り上げるため、古閑による「池上音頭」が作られた。昭和四十四年七月八日に村田英雄とコロムビア・ローズによって録音された。村田は「おぼえやすくて、聞

けば聞くほど味のある、古閑先生ならではのいい歌ですね。先生のよさがみんなでてますよ。歌っても踊っても、広場でも、お座敷でも、どこでも歌える歌です」と絶賛する。ローズも「日蓮宗らしくいせいがよくって、おぼえやすくて、思いきり歌えました。私はお題目の家で育ちましたので、とくに力がいりました」と好感触である⁹²。「池上音頭」の振り付けは、大正から昭和戦前期に人気女優であった栗島すみ子が行った。八月四日の発表式には古閑とローズが参加している。

同年末には、池上本門寺の活動について、本門寺文化部長酒井謙祐が司会となり、評論家高木健夫、学習院女子短期大学教授紀野一義、池上スポーツ普及クラブ代表小野喬、古閑の四人で座談会が開かれた。この席で古閑は聖歌隊を使った抱負を語っている。

「折角本門寺には、聖歌隊もあり、鼓笛隊もあるんですから、そういうものをドンドン動員してですねー、昼間は小野さんが指導されておられる池上スポーツ・クラブの体育祭をやり、夜は聖歌隊を中心とした万燈行列でもあればー、お会式というものを全然知らなかった人達でも、当然関心を持つようになりますからねえ」、「全国のご寺院にお願いしたいのですけど、本門寺が率先して発足させた。仏教音楽研究会の問題もー今回、日朗菩薩のご遠忌に初めて本門

寺聖歌隊が参加する訳ですが、これも、これらの音楽法要のありかたを考える時、単に本門寺自身の問題ではなく、広く仏教寺院全体の問題として取り上げ考えていただきたいと思うのです⁹³。

古関は宗教団体の団体歌を複数作曲してきたため、そうした仏教音楽の世界を意識していたのかもしれない。しかし、実際に作られた「池上音頭」は「沼田天狗おどり」に類似しているところがあり、仏教音楽と音頭の融合とは言い難い。この後に池上本門寺の文化活動と古関の接点がいつまで続いたのかはわからない。「池上音頭」は現在でも踊り続けられている。

この翌年の昭和四十五年に北海道音更町では、開基七〇年記念および行政施行五〇年記念として「音更町歌」と「音更音頭」を制定した。五月には作詞作曲者とレコード化が決まっている⁹⁴。ここで面白いのは、「音更町歌」（作詞・三村洋、歌・三鷹淳）は映画「ゴジラ」シリーズの音楽担当で有名な伊福部昭が作曲し、「音更音頭」（作詞・佐川桂司、歌・村田英雄、島倉千代子）を作曲した古関は映画「モスラ」の音楽担当をしており、円谷プロの特撮映画の音楽担当者が顔を揃えているのである。

伊福部は少年時代に音更に住んでいたため、その縁から作曲することとなった。ただし、古関が選ばれた理由ははっきりしない。開基七〇年記念事業運

営委員会では、七月にレコードが完成すると音更町の各学校に配布するほか、二〇〇円で販売も行った。七月十日、十三日、二十二日には、「音更音頭」の振り付けをした帯広在住の舞踊家藤間真澄によって踊りの講習会が開かれた⁹⁵。そして九月十七日には「開基七十年の記念式典」の前夜祭として、音更駅前で「音更音頭踊り大会」が行われた⁹⁶。

昭和五十一年（一九七六）には「音更音頭保存会」が発足し、町文化協会芸能発表会や町内各地の盆踊りで「音更音頭」の普及活動に努めている。「音更おんど一万人の夕べ」は会場となっていた中央道の道路改良工事などを契機に平成十一年（一九九九年）以降中止となったが、その後も「音更音頭」は保存会の活動によって生き続けている⁹⁷。

この「音更音頭」を境として、古関は新民謡をほとんど作曲しなくなる。昭和五十四年に埼玉県蕨市の「わらび小唄」が東芝からレコード化されているが、これも昭和二十三年に作曲したものである。自治体歌を除く新曲としては、昭和四十五年七月の「わらじ音頭」（作詞・丘灯至夫）、同四十八年五月の「串本ぞめき」（作詞・西沢爽、歌・美空ひばり）、同五十年の「落合音頭」（作詞・石井楚江、歌・三沢あけみ）、同五十六年八月の「ふるさと盆唄」（作詞・丘灯至夫）、同五十八年の「赤灯台の歌」（同上）くらいしかない。「わらじ音頭」と「ふるさと盆唄」は、古関の郷里である福島との関係で作曲したもの

である。⁽⁹⁸⁾

「赤灯台の歌」は、愛媛県今治市の唐小浜沖にある赤灯台を題材にして作られた。もともと赤灯台は来島海峡西水道入り口にあったが、昭和五十三年に役割を終えた。今治地方観光協会長の赤穂義夫は、赤灯台の保存を希望して唐子沖に移設させた。赤灯台の歴史と保存を望む赤穂は、丘灯至夫と古関に「茶の間で気軽に歌える歌」の制作を依頼した。古関と丘は昭和五十五年五月に現地を視察している。古関が「灯台へ行きたい」と希望したため、漁船で近くまで向かった。この歌を録音した俳優の矢野敬は今治出身で、赤穂が孫のように可愛がっていた。古関邸で丘の指導のもと、一週間練習している。古関と丘は、「瀬戸内海のご真ん中で育ったんだから、風景を心に思い描いて歌ってください」と要求した。「赤灯台の歌」は、こうして仕上がったが、時間が経つにつれて地元民からも忘れられてしまった。⁽⁹⁹⁾

昭和四十年代後半から古関の新民謡が激減するのは、彼に代わる新しい作曲家が登場してきたことが大きい。その点について埼玉県を事例に検討する。浦和市は昭和五十一年九月に「浦和おどり」(作詞・海老川充江、歌・都はるみ)、熊谷市は同五十二年十月に「くまがやまつり音頭」(作詞・馬場泰子、補作・丘灯至夫、歌・都はるみ)、志木市は同五十三年一月に「志木おどり」(作詞・石本美由起、歌・

島倉千代子)、戸田市は昭和五十六年六月に「戸德音頭」(作詞・石田政男、補作・森菊蔵、歌・都はるみ、井沢八郎)を制作しているが、いずれも作曲はコロムビアの市川昭介である。⁽¹⁰⁰⁾市川は古関と同じ福島県出身で、昭和三十六年に職業作曲家となった。ちなみに昭和五十四年に市制二十周年を記念して東芝で作られた「わらび音頭」(作詞・中村泰三、歌・由紀さおり)も市川の作曲であり、その裏面に既存の「わらび小唄」をレコード化したといえる。⁽¹⁰¹⁾新たな音頭は古関ではなく、市川に依頼されている。

昭和二十三年の「わらび小唄」は、同年四月に高橋庄次郎が町長に就任すると、町民の愛唱歌を企画したことからは生まれた。歌詞は一般公募で第一蔵小学校(現・蔵市立北小学校)長の栗原勇蔵の作品が選ばれた。栗原が懇意にしていたコロムビアの文芸部長を介して古関が作曲することになった。作曲ができると、古関は蔵の小学校で伴奏し、婦人会の女性たちに歌唱指導を行った。昭和二十三年十月に整理工場跡の野外ステージで開かれた発表会では、安西愛子が歌っている。そして文芸部長から「歌が気に入ったら、五万円を用意しろ、そしたら作曲者の伴奏で、同社専属の霧島昇さんと、NHKの歌のおぼさんの安西愛子さんの兩人に吹っ込みをさせ、レコードは五百枚よこす」と言われた。しかし、予算は用意できなかった。⁽¹⁰²⁾三〇年を経てレコード化が実現したが、「わらび小唄」は「わらび音頭」の影に

隠れるかたちになつてしまった。

昭和四十年代を迎えても古関の社歌の作曲数が減らなかつたのは、クラシックの芸術性による力強さと、歌謡曲の大衆性による親しみ易さとが融合し、歌謡曲だけを専門に作る作曲家との違いがあつたからである。⁽¹⁰⁾しかし、新民謡は、歌謡曲だけを専門に作る作曲家でも作ることができた。昭和四十年代に歌謡曲から「演歌」というジャンル分けがなされるようになると、懐メロ的な歌謡曲の作曲家ではなく、「演歌歌手」のヒット曲を生み出す作曲家に、新しい感覚で作つてもらふことを期待するようになったと考えられる。

おわりに

古関裕而の新民謡を検討すると、昭和十年代前後までの作品は、彼がヒット曲に恵まれず苦悩していた頃に会社から回つてきたものが多い。昭和初年の金融経済恐慌や昭和恐慌による慢性的な経済不況は、昭和九年頃から景気回復へと向かつた。前年の「東京音頭」が爆発的にヒットしたこととも重なり、全国各地の新聞社や観光協会などの団体が地域振興や観光招致を目的とした新民謡の制作を企画した。博覧会を開催するところもあつた。新民謡ブームに乗つて生み出された音頭や行進曲は、地域振興の振興曲と位置づけられる。

新民謡は地元でしか売れないため、ヒットする可能性が低かつた。しかし、古関は楽曲を使い回すようなことはせず、真面目にオリジナルの佳曲を量産した。この動きは昭和十二年に開戦した日中戦争により中断するが、同二十年にアジア・太平洋戦争が終結すると再始動した。戦後復興と地域振興とが重なり、全国各地で新民謡を求めた。古関は戦中に戦時歌謡、戦後に歌謡曲のヒットを連発し、人気作曲家として知名度を上げていた。戦前の古関とは異なり、戦後は人気作曲家の作品としての評価がつけられた。昭和二十年代に古関の新民謡は最盛期を迎えた。

こうした動きに注目すると、地域振興や観光誘致を目的とした博覧会の開催や、そのテーマソングとして作られる新民謡は、戦後に始まる新しい文化ではなく、戦前に生まれたものの連続性として考えることができる。昭和三十年代から四十年代の高度経済成長期に新民謡は最盛期を迎える。この頃にはレコードがSP盤からEP盤へと変わり、さらに安価で作れるシートが登場するようになる。レコードの製造および価格が下がったことが全国の新民謡を増産させる一助となっている。この点は高度経済成長期に増加した社歌と軌を一にする。古関の場合、社歌はこの時期に最盛期を迎えるが、新民謡の作曲数は激減している。その理由としては市川昭介のような新民謡の新たな担い手が登場し、古関が作り出す

曲は懐メロ扱いとなり、歌謡曲のヒット傾向が大きく変わったからだと考えられる。

古関が作曲した新民謡は、誕生から古いもので約九〇年、新しいものでも約五〇年という歳月が経過している。それらのうち現役で使用されているものは限られる。残り続ける曲と、消えてしまった曲との境界線には、三つのことが言える。一つ目は、昭和三十五年以前にSP盤でプレスされた曲が、それ以降のEP盤で再び復刻されたか否かである。盆踊りの会場でオーディオ機器（レコードの回転数や針がSP盤に対応しない）が変わったことでEP盤は流せても、SP盤は流すことができなくなる。この物理的な問題が、その後に曲が忘れられていく大きな原因と考えられる。

この点と関わる二つ目は、SP盤からEP盤へと変ったときに、古関作曲の新民謡を復刻プレスするのではなく、別の作曲家による新しい新民謡を制作し、その曲が登場したことにより、以前までの古関作曲の新民謡が使われなくなることである。「観光蒲郡の歌」は「蒲郡ふるさと音頭」に代わってしまった。そして三つ目は、各地元で新民謡を継続して残していくとする舞踊団体が、継承や保存に努める対象曲とするか否かである。この点については「刈谷音頭」や「音更音頭」などで確認した。

令和二年の朝ドラ「エール」で古関に注目が集まったため、各地で忘れられていた新民謡が再び注

目を浴びるようになった。筆者も愛知県豊橋市の「夢の豊橋」と「豊橋観光音頭」、岐阜県飛騨市の「飛騨古川小唄」、香川県高松市の「高松夜曲」などを発掘し、その内容が地元紙やNHKの地元ニュースで取り上げられた¹⁰⁾。しかし、こうした注目度もドラマ放送が終了すると、一過性の盛り上がりで終わり、再び地元民の記憶から遠ざかってしまう可能性が高い。昭和時代以前に誕生した民謡に比べて、昭和時代にレコード産業が生み出した新民謡を後世に継承させていくことは簡単ではない。そうした歴史課題の難しさを、作曲家古関裕而の作品に限って見ても、教えてくれているのである。

註

- (1) 拙著『古関裕而』中公新書、二〇一九年、『古関裕而秘曲集』新民謡・ご当地ソング編』日本コロムビア、二〇二一年。
- (2) 大石始「ニッポン大音頭時代―「東京音頭」から始まる流行音楽のかたち―」河出書房新社、二〇一五年。
- (3) 『東奥日報』一九三二年七月二十四日、朝刊。
- (4) 同右、一九三二年八月二十四日、夕刊、八月二十五日、夕刊、八月二十八日、夕刊。
- (5) 『山形新聞』一九三三年六月十一日、朝刊。
- (6) 前掲『古関裕而』参照。
- (7) 前掲『山形新聞』一九三三年六月十八日、朝刊。
- (8) 同右、一九三三年六月二十五日、朝刊。

- (9) 拙稿「東京音頭の創出と影響」(『商学研究』三一、二〇一五年三月) 参照。
- (10) 『佐賀新聞』一九三四年七月二十日、七月二十四日、八月二日朝刊(佐賀県立図書館所蔵)。
- (11) 「レーベルコピー」日本コロムビア所蔵。
- (12) 前掲「東京音頭の創出と影響」参照。
- (13) 『関門日日新聞』一九三五年八月八日(山口県立山口図書館所蔵)。
- (14) 同右、一九三五年八月十日。
- (15) 同右、一九三五年八月十九日。
- (16) 同右、一九三五年八月二十三日。
- (17) 同右、一九三五年八月二十八日。
- (18) 『国産振興四日市大博覧会協賛会誌』国産振興四日市大博覧会協賛会、一九三七年、一九一頁。
- (19) 北野保『よっかいち歴史浪漫紀行』四日市商工会議所、二〇一一年、一二八～一二九頁。
- (20) 『敦賀市教育史 人物編他』敦賀市教育委員会、二〇〇四年、三五～三六頁。
- (21) 『中日新聞』二〇一〇年六月五日。
- (22) 『菅平シーハイルの歴史』菅平高原観光協会作成。
- (23) 『信濃毎日新聞』一九三六年十月三十日、朝刊。
- (24) 工藤泰子「戦時下の観光」(『京都光華女子大学研究紀要』四九、二〇一一年十二月)、『毎日新聞』二〇一九年四月十日、朝刊参照。
- (25) 『中国新聞』一九四六年八月九日。
- (26) 同右、二〇二〇年一月三日、「よみがえる幻の歌 古関裕而 歌謡ひろしま」(NHK広島、二〇二〇年十月三十日放送)。
- (27) 長崎新聞社編『長崎県の歌謡史』長崎新聞社、一九七五年、二五九～二六一頁参照。
- (28) 『松江市誌』松江市、一九八九年、二九一～二九二頁。
- (29) 『松江商工会議所七十年史』松江商工会議所、一九六七年、二〇〇～二〇一頁。
- (30) 森口保「観光・貿易と観光大博覧会」(『島根観光学会誌』一三、一九九五年七月) 参照。
- (31) 中路秀夫「松江の歌謡曲」(『湖都松江』一六、二〇〇八年九月) 参照。
- (32) 島根県庁広聴広報課提供資料。
- (33) 『観光高松大博覧会誌』高松市役所、一九五一年。
- (34) 同右、一二二頁。
- (35) 同右、一二二頁。
- (36) 『静苑』静岡鉄道、一九八九年十二月。
- (37) 『西宝民報』一九五〇年六月四日(蒲都市図書館所蔵)。
- (38) 同右、一九五〇年七月二日、七月十六日。
- (39) 同右、一九五〇年七月三十日。
- (40) 同右、一九五〇年八月六日。
- (41) 同右、一九五〇年九月三日。
- (42) 同右、一九五〇年九月三日。
- (43) 同右、一九五〇年九月十七日、十月一日。
- (44) 同右、一九五一年三月二十八日。
- (45) 同右、一九五一年三月二十八日。
- (46) 「飛騨古川の歌募集歌詞成績発表」(飛騨市役所所蔵)。
- (47) 『BUN-KAI』一七号、二〇一六年一〇月、「刈谷音頭・刈谷小唄特集」(『市民だより』二〇二〇年八月一日号)。
- (48) 『倉敷だより』創刊号、一九五一年六月(倉敷市総務課歴史資料整備室所蔵)。

- (49) 同右、三号、一九五一年十一月。
- (50) 同右、七号、一九五二年二月。
- (51) 豊橋市図書館提供資料。
- (52) 『東三新聞』一九五二年七月八日（豊橋市図書館所蔵）。
- (53) 同右、一九五二年六月二十六日、七月十日、『広報とよはし』七十七号、一九五二年七月（豊橋市図書館所蔵）。
- (54) (55) 「座談会歌謡曲の世界」〔婦人公論〕一九五一年六月号。
- (56) 曲順は赤坂が一番目、鈴木が四番目で直接対決ではない（NHKウィークリーステラ臨時増刊『紅白五〇回―栄光と感動の全記録―』財団法人NHKサービセンタ―、二〇〇〇年、一七一頁）。
- (57) 『葛飾区政ニュース』四八号、一九五一年二月（『葛飾区のお知らせ 縮刷版』葛飾区広報室、一九七一年）。
- (58) 同右、五〇号、一九五一年三月（同右）。
- (59) 『葛飾区おしらせ』三三号、一九五一年六月（同右）。
- (60) 『徳島新聞』一九五三年一月二十四日、四月十五日、阿北版、『池田新聞』六十九号、一九五三年四月二十日。
- (61) 戸家誠「古閑裕而が作曲した『阿波池田小唄』」（『三好郷土史研究会誌』二九号、二〇二二年五月）参照。
- (62) 『池田新聞』七十七号、一九五三年七月十日、同上、八〇号、一九五三年八月十日。
- (63) 同右、八〇号。
- (64) 『旬刊ニュー井原』二七号、一九五四年三月、井原史談会編『写真集明治大正昭和井原・後月』国書刊行会、一九八〇年、一四六頁。
- (65) (66) 『北國新聞』一九五四年六月十四日、夕刊（国立国会図書館所蔵）。
- (67) 同右、一九五四年七月二十三日、夕刊、八月一日、夕刊。
- (68) 同右、二〇〇六年六月七日、「ふるさと唄紀行・一四」『百万石音頭』（『北國文華』八四号、二〇二〇年六月、九〇頁）。
- (69) 『長崎日日新聞』一九五四年八月二十三日～二十五日（長崎県立図書館所蔵）。
- (70) 同右、一九五四年八月十三日。
- (71) 『札幌狸小路発展史』札幌狸小路商店街振興組合、一九六七年、一〇四～一〇五頁。
- (72) 『さっぽろ狸小路』札幌狸小路商店街商業協同組合、一九六一年、三四頁。
- (73) 金田一昌三『狸小路』北海道テレビ企画局、一九七三年、四八～四九頁。
- (74) 古閑裕而「古閑裕而―鐘よ鳴り響け―」日本図書センター、一九九七年、二三二～二三三頁。
- (75) 「大衆音楽を世に広めた偉人と詩人」（『武田鉄矢の昭和は輝いていた』二〇一七年十一月十日放送）。
- (76) 大久保保「NHK朝ドラ『エール』古閑裕而と軽井沢」（『軽井沢新聞』二〇二〇年七月号）参照。
- (77) 『軽井沢百年の歩み』私家版、一九八五年改訂版、八九頁。
- (78) 『大田市報』第二号、一九五四年七月五日（大田市役所所蔵）。
- (79) 『石見タイムズ』一九五七年五月十一日。
- (80) 『おぎよん』沼田青年会議所、一九七六年、八八～八九頁（沼田市立図書館所蔵）。
- (81) 『週刊利根』一九五八年十月二十六日号（同右）。
- (82) 同右、一九五九年八月二十三日号。

- (83) 同右、一九五九年九月十三日号。
- (84) 同右、一九五九年九月二十七日号。
- (85) 同右、一九五九年十月十八日・二十五日合併号、十一月十五日号、『沼田市政だより』六五号、一九六〇年一月〔沼田市政だより縮刷版〕群馬県沼田市役所、一九七七年、二〇五頁〔沼田市立図書館所蔵〕。
- (86) 『下野新聞』一九五九年七月三日、九月二十二日、十月八日、『オール栃木』一九五九年十月号〔栃木県立図書館所蔵〕。
- (87) 『オール栃木』一九五八年十月号〔同右〕。
- (88) 『越路町史』通史編・下、越路町、二〇〇一年、四六三～四六四頁。
- (89) 『愛媛新聞』一九六一年四月一日〔新居浜市立図書館所蔵〕、新居浜市立図書館の杉田氏・横井氏調査資料（二〇二一年四月作成）。
- (90) (91) 「新しいかたちの讃仏歌を―朗子少年少女合唱団を指導する古閑裕而氏―」〔池上〕一九六八年八月号〔池上本門寺所蔵〕。
- (92) 「素晴らしい歌ですネ―池上音頭を吹き込んだ村田英雄さん―」〔同右、一九六九年八月号〕。
- (93) 「イメージチェンジが最大急務―今後の寺院活動―」〔同右、一九六九年十二月号〕。
- (94) 『おとふけ』二八六、一九七〇年五月二十二日〔音更町図書館所蔵〕。
- (95) 同右、二九一、一九七〇年七月二十日。
- (96) 同右、二九五、一九七〇年九月一日。
- (97) 『十勝毎日新聞』二〇一五年六月二十五日夕刊、二〇一八年六月二十二日、二〇二二年十月二十五日〔音更町図書館

- 所蔵〕。
- (98) 拙稿「作曲家古閑裕而と福島との関係性」〔総合文化研究〕二八巻一・三号、二〇二三年三月 参照。
- (99) 『愛媛新聞』二〇二三年三月五日。
- (100) 「レーベルコピー」〔日本コロムビアレコード株式会社所蔵〕。
- (101) 『広報わらび』二八九、一九七九年八月〔蔵市立図書館所蔵〕。東芝専属の由紀さおりが歌っているため、蔵市は由紀に歌唱してもらうことを第一に希望したと考えられる。古閑と市川はコロムビアの専属であるから、蔵市はコロムビアに東芝からレコード化するため、両者の使用料をコロムビアに支払ったに違いない。こうした所属を二つに跨るかたちでのレコード制作は、通常よりも高額な費用がかかる。
- (102) 金子吉衛『わがまち蔵の戦後十五年史』さきたま出版会、一九九〇年、二五〇～二五一頁。
- (103) 拙稿「作曲家古閑裕而の社歌と企業ソング」〔近代日本租税史研究会編『近代日本の租税と社会』有志舎、二〇二四年九月刊行予定〕 参照。
- (104) 『中日新聞』二〇二〇年六月十日、『岐阜新聞』二〇二〇年六月二十五日、『四国新聞』二〇二二年八月十五日。
- 〔付記〕 本稿の執筆にあたっては、佐賀県立図書館所蔵、山口県立山口図書館所蔵、四日市市立図書館、島根県庁広聴広報課、蒲郡市図書館、飛騨市役所、刈谷市教育委員会教育部署スポーツ課指導係、倉敷市総務課歴史資料整備室、豊橋市図書館、三好市総務部総務課、長崎県立図書館、大田市役所、沼田市立図書館、栃木県立図書館、新居浜市立図書館、

池上本門寺、音更町図書館、日本コロムビアレコード株式会社、蔵市立図書館から史料の閲覧および提供でご協力いただきました。この場をかりて御礼申し上げます。

Abstract

This paper examines how the new folk songs composed by Koseki came to life, chronologically from pre-war to post-war. Examining the creation process of Koseki's works, I will reveal that the purpose behind the creation of his new folk songs was to attract tourism and revitalize regional Japan. I will then examine the differences between Koseki's works that continue to remain popular and those of his works that have disappeared.

古閑裕而の新民謡と地域振興

表 1 新民謡・ご当地ソング・自治体歌の一般発売レコード一覧

	レコード 番号	発売年月日	曲名	作詞	歌手
1	26340	昭和 6 年 6 月 20 日	福島行進曲	野村俊夫	天野喜久代
2		昭和 6 年 6 月 20 日	福島小夜曲	竹久夢二	阿部秀子
3	26680	昭和 6 年 11 月 12 日	大邱行進曲	月原橙一郎	藤山一郎
4	26686	昭和 6 年 12 月 15 日	菅原高原の唄	島田芳文	丸山和歌子
5	26720	昭和 7 年 1 月 20 日	室蘭小唄	岡正二	丸山和歌子
6	26775	昭和 7 年 1 月 20 日	我等の満洲	西岡水朗	内田栄一
7	26926	昭和 7 年 5 月 15 日	元山行進曲	井上武夫 (補作：時雨音羽)	中野忠晴
8	26971	昭和 7 年 6 月 1 日	阿里山小唄	市来種三	中野忠晴
9	27018	昭和 7 年 6 月 20 日	我等の平壤	西東十四春	中野忠晴
10	27108	昭和 7 年 8 月 25 日	八戸行進曲	谷草二	中野忠晴
11	27113	昭和 7 年 9 月 15 日	大連行進曲	秋山敏夫	米倉俊英
12	27223	昭和 8 年 1 月 20 日	日本アルプス行進曲	本山卓	関種子／中野忠晴
13	27427	昭和 8 年 5 月 10 日	青森市民歌 (旧市民歌)	岩村芳麿	中野忠晴／コロムビア 混声合唱団
14	27497	昭和 8 年 7 月 25 日	山形県スキー小唄	吉尾薄鳥	蒲池幸鎮
15	27527	昭和 8 年 8 月 20 日	麗しの瀬戸内海	佐藤惣之助	中野忠晴／淡谷のり子
16	27717	昭和 9 年 1 月 10 日	哈爾賓小唄	仲しゆん作 (補作：佐 藤惣之助)／鈴木勇作 (補作：佐藤惣之助)	藤本二三吉／中野忠晴
17	27756	昭和 9 年 2 月 5 日	大連祭	堤秀二	松平晃
18	27759	昭和 9 年 2 月 10 日	みなと尾道	伊藤章二 (補作：佐藤惣之助)	松平晃
19	27841	昭和 9 年 4 月 20 日	北見小唄	新北秋	松平晃
20	27842	昭和 9 年 4 月 20 日	相生小唄	浦山晴美 (補作：高橋掬太郎)	中野忠晴
21	27911	昭和 9 年 6 月 20 日	山は六甲	島田芳文	中野忠晴
22	28018	昭和 9 年 8 月 20 日	旅順行進曲	高橋掬太郎	伊藤久男
23	28058	昭和 9 年 9 月 20 日	佐賀はよいとこ	蒲原政二郎	藤本二三吉
24	28061	昭和 9 年 9 月 20 日	宮崎県民歌	桑原節次	中野忠晴／伊藤久男
25	28063	昭和 9 年 9 月 20 日	九州よいとこ	西岡水朗	赤坂小梅
26	28089	昭和 9 年 10 月 10 日	京はよいとこ	時雨音羽	松平晃
27	28218	昭和 10 年 1 月 20 日	瀋陽小唄	卜藏諄良	伊藤久男
28	28219	昭和 10 年 2 月 20 日	キャピタル新京	卜藏諄良	伊藤久男

古関裕而の新民謡と地域振興

	レコード 番号	発売年月日	曲名	作詞	歌手
29	28338	昭和 10 年 4 月 5 日	平よいとこ	岡部夜権 (補作：高橋掬太郎)	分山田和香
30	28469	昭和 10 年 7 月 30 日	新満洲小唄	卜蔵諄良	音丸
31	28544	昭和 10 年 8 月 20 日	躍進台湾	渡辺三星一 (補作：佐藤惣之助)	明本京静
32	28511	昭和 10 年 9 月 20 日	躍進の宇部	古谷以和雄	伊藤久男
33	28569	昭和 10 年 10 月 1 日	丸八ばやし	高橋掬太郎	豆千代
34	28588	昭和 10 年 10 月 11 日	大都大阪	岸本水府	ミス・コロムビア
35	28551	昭和 10 年 10 月 20 日	伸びゆく朝鮮	佐藤惣之助	中野忠晴
36	28728	昭和 11 年 1 月 10 日	金沢をどり	高橋掬太郎	豆千代
37	28685	昭和 11 年 1 月 20 日	遠州ばやし	山村はやし	豆千代
38	28727	昭和 11 年 1 月 20 日	大敦賀行進曲	高橋掬太郎	伊藤久男
39	28838	昭和 11 年 3 月 25 日	大富山行進曲	安藤やすを (補作：コ ロムビア文芸部)	伊藤久男
40	28839	昭和 11 年 3 月 25 日	躍進四日市	高橋掬太郎	伊藤久男
41	28885	昭和 11 年 5 月 20 日	観光名古屋	高橋掬太郎	松平晃
42	28980	昭和 11 年 7 月 1 日	ミス仙台	西條八十	二葉あき子
43	28981	昭和 11 年 7 月 10 日	拓けゆく樺太	長谷川志人	伊藤久男
44	28983	昭和 11 年 7 月 15 日	八幡行進曲	松尾要一郎 (補作：コ ロムビア文芸部選譜)	松平晃
45	29060	昭和 11 年 9 月 17 日	汎太博行進曲	高橋掬太郎	松平晃、二葉あき子
46	29029	昭和 11 年 9 月 20 日	串本そだち	西岡水朗	音丸
47	29118	昭和 11 年 11 月 10 日	菅平シーハイル	高橋掬太郎	松平晃
48	29174	昭和 11 年 12 月 25 日	ミス秋田	高橋掬太郎	二葉あき子
49	29175	昭和 12 年 1 月 15 日	広島娘	久保田宵二	二葉あき子
50	29274	昭和 12 年 3 月 10 日	高雄みなと節	栗原白也	二葉あき子
51	29308	昭和 12 年 4 月 15 日	ミナト青森	高橋掬太郎	霧島昇
52	29309	昭和 12 年 4 月 25 日	函館市民歌	阿部竜夫 (補作：西條八十)	中野忠晴
53	29310	昭和 12 年 4 月 30 日	オルソ清津	森田勝美	伊藤久男
54	29312	昭和 12 年 5 月 1 日	北海博をどり	大北磊 (補作：西條八十)	音丸、伊藤久男
55	29398	昭和 12 年 7 月 5 日	ミス東北	西條八十	二葉あき子
56	29433	昭和 12 年 7 月 5 日	黎明の満洲	久保田宵二	伊藤久男
57	29497	昭和 12 年 8 月 15 日	躍進青森	千葉伝蔵	霧島昇

古関裕而の新民謡と地域振興

	レコード 番号	発売年月日	曲名	作詞	歌手
58	29948	昭和 13 年 10 月 20 日	躍進大甲	栗原白也	霧島昇
59	30171	昭和 14 年 4 月 20 日	戦時市民の歌	中川二郎	伊藤久男、松原操
60	30170	昭和 14 年 5 月 20 日	国都音頭	藤田虎雄	音丸、伊藤久男
61	A413	昭和 23 年 6 月	函館港まつり	野村俊夫	伊藤久男、音丸
62	A448	昭和 23 年〔9 月〕	恋し大阪	サトウハチロー	藤山一郎
63	A533	昭和 24 年 4 月 1 日	名古屋かっぽれ	中部日本新聞社選定歌	近江俊郎、山田陽子
64	A641	昭和 24 年〔11 月〕	茨城夜曲	新堀一夫 (補作：藤浦洸)	霧島昇、奈良光枝
65		昭和 24 年〔11 月〕	水郷音頭	岩崎巖 (補作：梅木三郎)	伊藤久男、久保幸江
66	A1047	昭和 26 年 2 月	福島県民体操		(演奏) コロムビア・ オーケストラ
67		昭和 26 年 2 月	福島県スポーツの歌	小林金次郎	藤山一郎、 コロムビア合唱団
68	A1277	昭和 26 年 10 月 20 日	広島よいとこ	菊田一夫	赤坂小梅
69	A1961	昭和 29 年 6 月	湯本小唄	西條八十	久保幸江、村岡十九夫
70	A1987	昭和 29 年 6 月	福島音頭	野村俊夫	伊藤久男、 神楽坂はん子
71		昭和 29 年 6 月	東山甚句	野村俊夫	霧島昇、久保幸江
72	A2008	昭和 29 年 8 月	百万石音頭	丘十四夫	伊藤久男、永田とよ子
73		昭和 29 年 8 月	金沢小唄	丘十四夫	久保幸江
74	A2027	昭和 29 年 9 月	長崎音頭	藤浦洸	藤山一郎、奈良光枝
75		昭和 29 年 9 月	長崎小唄	藤浦洸	久保幸江
76	SA-298	昭和 34 年 11 月 20 日	浅草ばやし	西沢爽	島倉千代子、神戸一郎
77	SA-502	昭和 35 年 12 月 10 日	花のスカイライン	内海久二 (補作：野村俊夫)	守屋浩
78		昭和 35 年 12 月 10 日	磐梯吾妻小唄	片山信次郎 (補作：野村俊夫)	伊藤久男、能沢佳子
79	SA-809	昭和 37 年 2 月 20 日	さぼてん囃子	宮本旅人	コロムビア・ローズ、 青木光一
80		昭和 37 年 2 月 20 日	えびの小唄	宮本旅人	島倉千代子、伊藤久男
81	SA-891	昭和 37 年 5 月 20 日	会津磐梯さん	門田ゆたか	神戸一郎、五月みどり
82	ALS-5217	昭和 48 年 5 月 25 日	串本ぞめき	西沢爽	美空ひばり
83	FH-217	昭和 56 年 8 月 1 日	ふくしま盆唄	丘灯至夫	歌川重雄、白百合姉妹

日本コロムビアレコード株式会社所蔵のレーベルコピーから作成。

古閑裕而の新民謡と地域振興

表2 新民謡・ご当地ソング・自治体歌の特別製造レコード・未発売曲一覧

	レコード番号 (原盤番号)	曲名	作詞	歌手	作成年月日
1		戸畑市歌	加藤参郎		昭和12年2月10日制定
2	PES-8205NP	釜石市民歌	広瀬喜志	釜石市合唱協会	昭和12年制定 (昭和58年7月30日完成)
3		塩竈市民歌	櫻井宏		昭和16年制定
4	(P2419)	長崎盆踊り	小川流太郎	霧島昇、音丸	昭和22年6月23日録音
5	PR-210	歌舞伎音頭	野村俊夫	霧島昇、久保幸江	昭和23年3月8日録音
6	PR-240、 PR-489	山形県スポーツ県 民歌	西條八十	藤山一郎	昭和23年5月14日録音
7	(P2798、 P2799)	上総炭焼唄	藤浦洸	小唄勝太郎、伊藤久男	昭和23年5月28日録音
8	PR-279	松江夜曲	西條八十	音丸	昭和23年7月8日録音
9	PR-278	三島小唄	社団法人三島商工 会議所	近江俊郎、久保幸江	昭和23年7月21日録音
10	PR-335	輝く郷土 (宮城県民歌)	遠山徳男	藤山一郎、安西愛子	昭和23年8月23日録音
11		宮城県体育歌	小川保	藤山一郎、安西愛子	昭和23年8月23日録音
12	(東芝) 4RS-914	わらび小唄	栗原勇蔵	由紀さおり	昭和23年10月発表 (昭和54年完成)
13		川俣小唄	本田青華		昭和23年
14	PR-389	高松夜曲	野村俊夫	藤山一郎、奈良光枝	昭和24年2月11日録音
15	PR-396	静岡ファンタジー	藤浦洸	藤山一郎、渡辺はま子	昭和24年3月2日録音
16		水戸市こどもの歌	関根利根雄		昭和24年5月5日発表
17		新庄市民歌	安藤壮一		昭和24年5月制定
18		たいら小唄	野村俊夫		昭和24年8月
19		市川市歌	田沢武夫		昭和24年11月制定
20	(テイチク) P-06	湯村夜曲	野村俊夫	楠木繁夫	昭和24年
21		不動岡小唄	宮沢章二		昭和24年
22	PR-680	福島ブルース	野村俊夫	黒木曜子	昭和25年4月5日録音
23		ふくしま小唄	野村俊夫	鶴田六郎、久保幸江	昭和25年4月5日録音
24	PR-690	飛騨古川小唄	峰陽之助	赤坂小梅／伊藤久男、 久保幸江	昭和25年4月11日、 5月5日録音
25		郡山さくら音頭	吉田一蔵		昭和25年4月20日発表
26	(P3454)	愛知県民歌「われ らが愛知」	若葉清成 (補作：西條八十)	藤山一郎、安西愛子	昭和25年8月14日録音

古関裕而の新民謡と地域振興

	レコード番号 (原盤番号)	曲名	作詞	歌手	作成年月日
27	(P3453)	行進曲 われらが 愛知		(演奏) コロムビア・ オーケストラ	昭和 25 年 8 月 14 日録音
28		野田市歌	香取佳津見		昭和 25 年 11 月 3 日制定
29	PR-886	観光蒲郡の歌	勝浦仙太郎(補作: サトウハチロー)	伊藤久男、奈良光枝	昭和 25 年 11 月 15 日録音
30	PR-942	刈谷音頭	藤浦洸	二葉あき子、岡本敦郎	昭和 26 年 2 月 21 日録音
31		刈谷小唄	サトウハチロー	赤坂小梅、鶴田六郎	昭和 26 年 2 月 21 日録音
32	PR-978	新熊谷音頭	藤浦洸	岡本敦郎、久保幸江/ 伊藤久男・安藤まり子	昭和 26 年 5 月 25 日録音
33	PR-979	葛飾音頭	葛飾区撰	岡本敦郎、久保幸江	昭和 26 年 5 月 25 日録音
34	PR-981	淀の流れは十三里	喜志邦三	霧島昇	昭和 26 年 6 月 23 日録音
35		内牧小唄	妻城良夫		昭和 26 年 7 月制定
36	PR-1054	横山町音頭	野村俊夫	藤本二三吉、伊藤久男	昭和 26 年 8 月 2 日録音
37	P3849	かなやま節	藤浦洸	伊藤久男、久保幸江	昭和 26 年 8 月 11 日録音
38		守口市歌	安西冬衛		昭和 26 年 11 月 1 日制定
39	PR-1071	倉敷小唄	塚本明弘 (補作: 西條八十)	岡本敦郎、奈良光枝	昭和 26 年 11 月 10 日録音
40		大牟田市歌 (旧)	吉田尊治		昭和 27 年 1 月 1 日制定
41	SPR-1146	只見川音頭 みさ こい節	国分傳三 (補作: 丘十四夫)	霧島昇、久保幸江、加 藤雅夫、平野礼子	昭和 27 年 2 月 22 日録音
42		只見川小唄	丘十四夫	伊藤久男、安藤まり 子、若山彰、平野礼子	昭和 27 年 2 月 22 日録音
43	(P4058)	ゆかた踊り	野村俊夫	伊藤久男、久保幸江	昭和 27 年 3 月 8 日録音
44	(P4059)	ゆかた恋月夜	野村俊夫	久保幸江	昭和 27 年 3 月 8 日録音
45	PR-1164	伊香保ヨキヨキ	サトウハチロー	藤山一郎、赤坂小梅	昭和 27 年 3 月 13 日録音
46		新曲とりたり節	サトウハチロー	藤山一郎	昭和 27 年 3 月 13 日録音
47	PR-1198	山梨観光小唄	深尾須鹿子	藤山一郎、二葉あき子	昭和 27 年 3 月 18 日録音
48	PR-1231	島根県民の歌 薄 紫の山脈	米山治	藤山一郎	昭和 27 年 5 月 13 日録音
49		島根県民の歌 青 い空なら	宮田隆	岡本敦郎、安西愛子	昭和 27 年 5 月 14 日録音
50	PR-1373	豊橋観光音頭	中林とみを	鶴田六郎、久保幸江	昭和 27 年 6 月 7 日録音
51	PR-1243	夢の豊橋	河田新太郎	岡本敦郎、奈良光枝	昭和 27 年 6 月 9 日録音
52	PLS7259	矢吹音頭	野木杏青	矢吹音頭保存会	昭和 27 年 10 月 1 日作曲
53	PR-1351	田川小唄	志村省三	赤坂小梅、鶴田六郎	昭和 28 年 8 月 18 日録音
54	PR-1352	阿波池田小唄	木下潤	久保幸江、鶴田六郎	昭和 28 年 8 月 19 日録音

古閑裕而の新民謡と地域振興

	レコード番号 (原盤番号)	曲名	作詞	歌手	作成年月日
55	(P4435)	美幌音頭	沖悠二郎	松田トシ	昭和 28 年 12 月 5 日録音
56	PR-1401	井原小唄	片山八郎 (補作：藤浦洸)	永田とよこ	昭和 29 年 3 月 22 日録音
57	PR-1406	おじゃれ節	野村俊夫	久保幸江	昭和 29 年 4 月 13 日録音
58		小地谷夜曲	野村俊夫	奈良光枝、青木光一	昭和 29 年 4 月 13 日録音
59	PR-1411	滋賀県民の歌	蓼沢獺 (補作：西條八十)	岡本敦郎、奈良光枝	昭和 29 年 6 月 19 日録音
60		行進曲 滋賀県民 の歌		コロムビア・オーケス トラ	昭和 29 年 6 月 19 日録音
61	PR-1428	狸小路ばやし	ほしやま・さくら (補作：丘十四夫)	永田とよこ、 山中ひろし	昭和 29 年 8 月 13 日録音
62		狸小路の歌	濱真弓 (補作：丘十四夫)	山路えり子	昭和 29 年 8 月 13 日録音
63	PR-1445	世田谷おどり	(補作：門田ゆた か)	池真理子、高倉敏／神 楽坂玉枝、山中博	昭和 29 年 9 月 10 日録音
64	PR-1450	御嶽柚唄	川合随軒	赤坂小梅、岡本敦郎	昭和 29 年 9 月 25 日録音
65	PES-7299	郡山市民の歌	内海久二	伊藤久男	昭和 29 年制定 (昭和 46 年 10 月 13 日録音、 12 月 1 日完成)
66	SPR-1467	あゝ藤原湖	西條八十	伊藤久男、奈良光枝	昭和 30 年 1 月 25 日録音
67	(P4871)	新軽井沢音頭	菊田一夫	永田とよこ、 山中ひろし	昭和 31 年 7 月 25 日録音
68		豊橋市歌	辰巳利郎 (補作：丸山薫)		昭和 31 年 10 月制定
69	PES-8043CP	小町温泉小唄	丘灯至夫	高世幸明、 わかばちどり	昭和 31 年作曲 (昭和 56 年 1 月 20 日完成)
70	PR-1707	しゃくなげ音頭	佐藤浩	島倉千代子	昭和 32 年 7 月 27 日録音
71	P5110	大田小唄	安部美枝子	岡本敦郎、奈良光枝	昭和 32 年 9 月 24 日録音
72	PR-1775	本宮甚句	本宮観光協会選定 歌	伊藤久男	昭和 33 年 4 月 3 日録音
73	PR-1787	福島子供盆踊り	福島市教育委員会 撰定	安田祥子、津田崇子、 木室博子	昭和 33 年 5 月 15 日録音
74	PR-1790	茅ヶ崎音頭	徳川夢声	赤坂小梅	昭和 33 年 6 月 11 日録音
75	PR-1791	御船小唄	緒方国弘 (補作：山口白陽)	川口義秋、岩崎千代	昭和 33 年 6 月 17 日録音
76	PS520	近江八幡市の歌 (旧)			昭和 33 年制定
77	(P5370)	長崎市民歌	長崎市制定	藤山一郎、安西愛子	昭和 34 年 5 月 6 日録音

古閑裕而の新民謡と地域振興

	レコード番号 (原盤番号)	曲名	作詞	歌手	作成年月日
78	(P5371)	長崎民謡 モッテ コイ節	長崎市制定		昭和34年5月6日録音
79	PR-1897	宇都宮ヘルスセン ター音頭	田沢武男	五月みどり、加藤雅夫	昭和34年9月録音
80		大谷小唄	堀江紅村	島倉千代子	昭和34年9月録音
81	PR-1902	沼田天狗ばやし	西條八十	コロムビア・ローズ、 村田英雄	昭和34年10月27日録音
82		水戸市歌 (旧)	西條八十		昭和34年11月3日制定
83	PR-1919	越路小唄	片桐顕智	島倉千代子／青木光一	昭和35年3月4日録音
84	(S-1970)	新居浜音頭	黒光千恵子	コロムビア・ローズ	昭和36年3月17日録音
85	PRE-1128	興津の四季	松永香苗	島倉千代子	昭和36年3月31日録音
86	PRE-1141	小浜みなと	山本和夫	伊藤久男	昭和36年5月17日録音
87		小浜音頭	大村主計	コロムビア・ローズ、 鳴海日出夫	昭和36年5月24日録音
88	PRE-1168	静岡県民の歌 沖 ゆく黒潮	桜井義久 (補作：西條八十)	伊藤久男	昭和36年10月7日録音
89	(S-2034)	益田音頭	徳川夢声	五月みどり	昭和37年3月14日録音
90	(S-2095)	新潟「万代」音頭	西條八十	藤原良、香川句子	昭和38年6月録音
91		あぶくま川	野村俊夫	伊藤久男	昭和38年
92		島原市民の歌	宮崎康平		昭和39年4月8日発表
93		阿武隈の歌	若山牧水		昭和41年4月
94		焼津市民歌	服部順市		昭和41年制定
95		相馬市民の歌	荒明 (補作：相馬 市民の歌審査特別 委員会)		昭和42年4月6日制定
96	PES-7152	池上音頭	野村俊夫	村田英雄、 コロムビア・ローズ	昭和44年7月8日録音
97	PR-D10	福島わらじ音頭	茂木宏哉 (補作：丘灯至夫)	舟木一夫、 加賀城みゆき	昭和45年7月5日発表
98	PES-7209	音更音頭	佐川桂司	村田英雄、島倉千代子	昭和45年7月20日完成
99		土岐市民歌	藤浦洸		昭和45年
100		金浦町民歌	藤浦洸		昭和46年1月24日作曲
101	(ビクター) 17VP-1030	落合音頭	石井楚江	三沢あけみ	昭和50年7月20日発表
102	(ポリドール) DI-1341	わがまち春日井	岡本淳三 (補作： 春日井市民の歌作 成委員会)	ダーク・ダックス	昭和53年10月制定

古関裕而の新民謡と地域振興

	レコード番号 (原盤番号)	曲名	作詞	歌手	作成年月日
103		大石田町民歌	斎藤茂吉		昭和 55 年 1 月
104		川俣町民の歌	佐藤良筠		昭和 55 年 12 月
105		赤灯台の歌	丘灯至夫	矢野敬	昭和 58 年
106		阿武隈に立ちて	木村正夫		不明
107		タンゴ阿武隈の月	坂内萬		不明
108		下田温泉小唄 (天草温泉小唄)	野口雨情		不明
109		国見音頭	白鳥省吾		不明
110		宮崎音頭	不明		不明
111	(ポリドール) DI-1332	裏磐梯	西直彦	菅原洋一	不明
112		夏の上高地	西直彦		不明

福島市古関裕而記念館所蔵の楽譜、レコード、日本コロムビアレコード株式会社所蔵のレーベルコピー、吹込み台帳、テープ台帳から作成。